

台湾の政権交代を読む (ライブラリ・コーナー)

著者	伊藤 えりか
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	254
ページ	53-53
発行年	2016-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00018783

台湾の政権交代を読む

今年五月二〇日に民進党の蔡英文が台湾の総統に就任し、台湾初の女性総統が誕生した。蔡英文は国際経済法の専門家として国立政治大学で教鞭をとる傍ら、行政院の複数の諮問委員会の委員を経て、政治家に転じた。李登輝（中国国民党）と陳水扁（民進党）と異なる政党の政権での実務経験があり、特に陳水扁政権では行政院副院長を務めた。二〇〇八年に陳水扁の後を受けて民進党の党首となったが、二〇一二年に馬英九と総統の座を争って破れ、党首を退いた。二〇一四年に党首に再選され、二度目の総統選に挑んだ。

台湾は日本から最も近い国のひとつで、歴史、経済、政治、文化いずれの面でも交流は深い。特に近年、台湾に対する国際社会の関心が高まり、関連の報道も出版物も増えている。政権交代した台湾の政治への理解を深める最近の資料・文献を紹介したい。

台湾では選挙の都度、政治家を取り上げた本が出版される。張靜文著『蔡英文の台湾——中国と向き合う女性総統』（毎日新聞出版 二〇一六年）（原題『蔡英文——從談判桌至總統府』城邦文化事業 二〇一五年）には、総統に当選する前に執筆され、蔡英文自身が書いた序文が含まれる。蔡英文が書いた序文が含

伊藤えりか

まれる。蔡英文が李登輝政権時代に臨んだWTO加盟交渉や中台の政治交渉、陳水扁政権時代の行政院副院長としての活動と経験が記されている。蔡英文著『蔡英文——新時代の台湾へ』（白水社 二〇一六年）（原題『英派——點亮台灣的這一哩路』圓神出版社 二〇一五年）には二〇一二年の総統選挙で敗北、下野した時期に台湾各地を回り、人々との対話と交流を通じて今後の台湾に貢献する方法を模索する過程が記されており、その政治信条と人柄を垣間みることが出来る。

今回の選挙結果については、当研究所研究員の竹内孝之が選挙直後に分析し、『二〇一六年台湾総統、立法委員選挙——国民党の大敗と蔡英文次期政権の展望』を研究所のウェブサイトに (http://www.ride.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/201602_takeuchi.html) で報告している。

台湾は歴史的経緯から、中国と緊密な関係にあり、台湾と中国の関係は常に国際社会で注目されている。中台関係はいくつかの段階を経てきた。なかでも、一九九二年に香港で中国と台湾の窓口機関のトップ会談で合意されたところ、「九二年コンセンサス」（九二共識）は中国と台湾の関

係の認識をめぐる大きな問題だ。陳水扁政権になってから表面化した。馬英九は政治・経済両面で中国との良好な関係を進めることを前面に押し出し、支持も得た。だが、政策推進が過ぎたため、台湾の現状維持を望む民衆から批判を受け、「ひまわり学生運動」と呼ばれる反政権運動に発展した。「九二年コンセンサス」に対する馬英九と蔡英文の認識の違いは「ひまわり学生運動」に先立つ二〇一二年の総統選挙でも争点になっている。これについては二〇一二年の総統選挙を解説した小笠原欣幸・佐藤幸人編『馬英九再選——二〇一二年台湾総統選挙の結果とその影響』（アジア経済研究所 二〇一二年）で触れられている。

蔡英文は前政権とは異なり、中国と一定の距離を保つ台湾独自の立場を主張している。そのため、メディアは特に蔡英文の対中姿勢に注目している。先にあげた『蔡英文の台湾——中国と向き合う女性総統』では中台政治に二章が割かれ、「九二年コンセンサス」に対する蔡英文のこれまでのスタンスが記されている。

新政権の対中政策やその問題点について、七月に当研究所の竹内孝之が「台湾——蔡英文政権発足前後の対中国関係」を研究所ウェブサイト上 (http://www.ride.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/201607_takeuchi.html) でレポートしているほか、「蔡英文政権

の登場と中台関係の展望」（アジアワールド・トレンド 二〇一六年六月号） (http://d.arch.ride.go.jp/idep/ZWT/ZWT201605_015.pdf) で分析している。

一九八八年に蔣経国が死去し李登輝が総統となって以来、陳水扁（二〇〇〇～〇八年）、馬英九（二〇〇八～一六年）が政権を担ってきた。一九九六年には初めて民主的選挙で総統が選出されるなど、台湾では民主化が進み、中国との関係にも大きな変化があった時期だ。三〇年余を政治、外交面から取り上げ、理解を助ける資料も少なくない。井尻秀憲著『激流に立つ台湾政治外交史——李登輝、陳水扁、馬英九の二五年』（ミネルヴァ書房 二〇一三年）では、時代背景も細かく解説されている。国内の政局や対中政策、初の総統直接選挙、それに続く民進党政権の誕生への流れがわかりやすい。

台湾現代史を専門とする若林正文の著作は欠かせない。若林正文編『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』（東京大学出版会 二〇〇八年）に書かれている「中華民国の台湾化」とは、中国大陸から移った中華民国政府の主権の及ぶ範囲が、台湾のみであるという現状を受け入れる、政治認識の変化である。民主化と並行して進んだ、「旧来の認識を変える」政治プロセスを論じている。

（つづき）えりか／アジア経済研究所 図書館